

この6年2組の教室に猓がやってきたのは、元はと言えば香代ちゃんが拾ってきたからである。

「この子はレイジューだから、きつとクラスにとっても良いことがあると思います」

霊獣が何かを分かっているのかいないのか、香代ちゃんは朝のホームルームで発言した。クラス中はそれに対して「おお」と歓声をあげ、一部では拍手も起こる。僕はすかさず反対する。

「猓は霊獣じゃなくて悪い妖怪だと思います」

僕の発言に対しては、先程までと違い溜息が漏れる。

結局、反対意見は僕一人で、皮肉なことにそのせいで僕が猓の飼育係となってしまうた。

「○○君にもこの可愛さをわかってもらわないと」

香代ちゃんはそう言う。本心で言う。将来は保母さんになりたいという香代ちゃん。そのお節介でしかない優しさに僕はイラつく。

しかし、実際飼育係になってみると、その世話は驚くほどに楽だった。餌は与えても食べない。それでも元気なところをみると、特に食べる必要はないようである。暴れたり鳴いたりもしない。ケージを汚すこともない。僕がやるのは朝早くに教室に行き、その元気に怠けている姿を確認するだけであった。

無論何も食べない生物などいない。餌が分かったのは数日後であった。

今日も退屈な授業は続く。先生に当てられ必要以上に大きな声で答えているのは大祐君だ。日焼けした肌に鍛えた体。運動の得意な彼の夢は野球選手だった。彼の性格と努力を見るに、将来そこそこの選手にはなれるかもしれない。だが、運動音痴の僕は彼によく馬鹿にされる。きっと分かり合えないだろう。その隣で必死にノートを写しているのは千比呂ちゃん。真面目でオシヤレな彼女は花屋さんになりたいと言っていた。きっと彼女の華やかな雰囲気に見合った可愛い花屋になるのだろう。しかし彼女は真面目さゆえに、よく僕のことを告げ口する。彼女とも分かり合える気はしない。

そんな二人の夢は、真っ先に獺に食われてしまった。

気付いたのは恐らく僕が最初だろう。当の本人たちですら気付いていないかもしれない。それは獺を飼いはじめて4日目の朝のこと、獺の足もとにビー玉くらいの玉が転がっていた。白くやや青みを帯びたその玉は糞にしては臭いがなく、その光彩は僕の知っているものではないものだった。そっと摘まんでみる。べた付くわけではなく、しつとりと餅のような弾力を持った玉だ。そして次の瞬間、僕の意識は別の場所へと飛んだ。

「これは……野球場？」

溢れんばかりの歓声、焼けつくような熱気。それはテレビで見る野球場の景色そのものだった。その後すぐに意識は教室へと戻る。

僕はすぐに気付く。それは食われてしまった大祐君の夢なのだ。驚くことではなかった。猥とはそういう生き物なのだ。初めから僕のような夢のない人にしか世話は出来ないのだ。その玉をそつとポケットにしまい込んだ。

その次の日、今度はピンクに近い玉が見つかった。触ると一面の花畑が見える。なるほど、これは千比呂ちゃんの夢だろう。新しい形のアロマセラピーとして売れるかもしれない。でも僕はその玉もポケットにしまい込む。

ちよつとした悪戯だ。

給食の時間。都合よくスープの当番だった僕は、休み時間に細かく刻んでおいた玉を中に忍ばせた。大祐君にはピンクの玉を。千比呂ちゃんには青の玉を。自らの夢がなくなっていることも自覚していない二人は、疑いなくそのスープを飲んだ。後はこの腹いせの効果が表れるのを待つばかりである。

それから数か月が経過した。大祐君は相変わらず体を鍛えようと走り込んでいる。でも前と違い走ることよりも、その途中にある木々や花を見ることが楽しみなようだ。きっと筋肉質な良い花屋になるだろう。千比呂ちゃんは運動部に入った。それまで彼女のことを堅物だと敬遠していた人とも仲良くなり、今日も練習に励んでいる。彼女の真面目さなら何らかの大会で成果もあげられるかもしれない。

「……………」

そうして僕の嫌がらせは失敗に終わり、世界は少しだけユニークになった。

猿飼いの少年 あとがき

小学生時代の夢を叶えると言うのは、思った以上に難しいなと感じます。

それを保ち続けることの大変さもさることながら、10年と言う月日は人を変えるし

職業のほうだって変わる。例えば宇宙に來た者を迎撃する宇宙生物が現れれば

宇宙飛行士と言う職業はなくなってしまうかもしれません。

ともあれ本編はそれとはあまり関係ないお話。

1634文字。2作目と言うことで短めの作品を。

一日で考えて書き上げたにしては、1作目よりもテーマらしい作品になって気がします。

何というか雰囲気か。